

特 集

## 10 年後のあなたへ！ ～その時のために、今、何をしますか～

長尾佳世子<sup>1</sup>

皆さん、こんにちは。先ほど、ご紹介にありました本学の赤十字・災害看護学領域で講師をしている長尾佳世子と申します。今回、このような機会をいただきありがとうございます。

このたび、学生から国際救援活動や災害救護活動についての話が聴きたいということから、国内・国外での救護・救援経験のある私にお話しがありました。特に、なぜ私が国際救援活動を行うことになったのか、活動を通じて一番印象に残っているエピソードを聴きたいと要望がありました。通常の授業でも、この辺りのお話をするのですが、今回はその時には使用しない写真や、授業ではそこまでは話さない内容なども盛り込んでみました。皆さんもこんな話もあるんだ、というように聴いて帰っていただければと思います。

今日は学生の参加が多いかと思っていましたが、学生以外の方にもたくさんお越しいただいていますので、まずは私の略歴を簡単にお話しします。私の学生時代には看護大学はまだ少なく、ご紹介にありましたように私は看護大学の出身ではなく、看護専門学校を

出ております。卒業後、名古屋第二赤十字病院に就職し、30 数年の臨床経験を積んできました。看護師長として勤務する中で、大学卒業の看護師が増えてきており、彼らと同じ立場にたって話をするためにも大学院に行って学ぼうと思い、2011 年に医療福祉マネジメント研究科に入学しました。同級生は 30 歳代から 60 歳代まで、ケースワーカーから理学療法士、作業療法士、高等学校教員、地方自治体職員、そして看護師と年齢も職種も多岐にわたる人たちと一緒に学びました。その後、2016 年度から本学で講師として勤務しています。

私の救護経験は名古屋第二赤十字病院時代に全て積んできました。国内では阪神淡路大震災救護活動、東海豪雨災害救護活動、そして、東日本大震災救護活動に出動しました。また、国際医療救援活動では 2004 年のイラン南東部地震災害被災者救援事業に看護師として派遣されたのを始まりに最後は 2015 年のネパール共和国地震被災者救援事業に看護師長として派遣されました。【写真 1】

### 私の救護経験

#### 【国内災害救護】延 4 回

- ◇ 1995 年 1 月 阪神淡路大震災救護 第 3 班 看護師として派遣
- ◇ 2000 年 9 月 東海豪雨災害救護 第 1 班・第 4 班 看護師長として派遣
- ◇ 2011 年 3 月 東日本大震災救護 第 1 班 看護師として派遣

#### 【国際救援活動経験】

- ◇ 2004 年 1 月～2 月 イラン南東部地震被災者救援事業 ERU 第 2 班看護師として派遣
- ◇ 2005 年 1 月～2 月 スマトラ島沖地震災害被災者救援事業 ERU 第 2 班看護師として派遣
- ◇ 2005 年 12 月～2006 年 2 月 パキスタン北部地震被災者救援事業 ERU 第 3 班看護師長として派遣
- ◇ 2015 年 6 月～7 月 ネパール共和国地震被災者救援事業 ERU 第 2 班看護師長として派遣

\* ERU(緊急対応ユニット):Emergency Response Unit

【写真 1】

<sup>1</sup> 日本赤十字豊田看護大学

## なぜ、私が国際医療救援活動を？

今日の話は、これらの派遣経験を踏まえて、私がどのような道のりで国際救援活動に従事することになったのかということと、印象に残っていることを聴きたいと要望がありましたので、その辺りの話をしたいと思います。

私が救護・救援に携わるまでに国内で8年、国際では15年くらい臨床現場での経験を積んでから派遣されました。よく聞かれるのは「何年くらいで派遣されますか？」で、あつたり「卒業したらすぐ行きたい。」という言葉です。しかし、実際にはそんなに簡単に行けるものではありません。また、もう一つ聞かれるのが、「なぜ、国際救援活動をすることになったのですか？」ということです。まず、皆さんが思い描かれるのは小さい頃から「世界の人々を救いたいと思い、国際救援を志す」というイメージを抱かれるかもしれませんが、実は私は国際救援どころか、看護師という職業に就くことさえ考えていませんでした。というより、看護師はなりたくない職業の一つでした。しかし、私の時代、看護専門学校の授業料は安く、その上、奨学金ももらえて、資格も取れるということでとても魅力的でした。周りの勧めもあって、看護専門学校に入学しました。しかし、なりたくない仕事でしたから、入学してからの成績は不良、学校の校則は看護大学の比ではなく厳しいものでした。私は全寮制ではありませんでしたが、2学年からは実習が多くなるため、入寮しました。その当時、全寮制の学校はもっと厳しかったと聞いています。もともと行きたくないところで、やりたくない勉強ばかりしなくてはならず、どんどん追い詰められていきました。

もういや、と思ったある日、私は図書館で時間を潰していました。図書館が一番、勉強しているように見えて、先生に何も怒られないで過ごせる場所でした。そこで、何気に見た雑誌に当時はシブスナースという仕事があると載っていました。もともと海も船も好きということで、これいい。どんな仕事をするのかはわからないけど、これやってみたい、と思いました。先日、ちょっと調べたら今はシブスナースという言葉になっていましたが、看護師の珍しい仕事の中に今もありました。ただ、仕事内容としては客船が対象となるため、私の乗船したコンテナ船とは少し、異なっ

ていました。

さて、ここでやりたいことが突如、見つかったため、とにかく卒業しなきゃいけない。こうなったらもう嫌な実習、というより記録も書かないといけない、卒業研究もやって、とにかく看護師国家試験に合格するしかない。私が今まで生きてきた中で試験というものでは、この国家試験が最も勉強したと思います。皆さん、よく覚えておいてください。看護師国家試験は、受からないといけない。だから、絶対に勉強しないとどうしようもないのです。このおかげで、無事に国家試験にも合格し、晴れて看護師免許が交付されました。就職時には、とにかく急変時でも一人でいろいろなことに対応できるようになりたいとICU（集中治療室）への配属を希望しました。希望表は第一希望も第二希望もICUと記載し、さすがに第三希望だけ救急外来と記載したのを覚えています。そのかいあつてか、ICUに配属されました。入社してからの3年間はとにかく「シブスナース！」ということで、1年目は、病院の敷地内にある寮からICUに通っていました。今、考えるといつ休みはあつたんだろうと思うくらい毎日、職場に行っていたのを思い出します。そうすると学ぶことは多く、患者さんの状態にしろ、治療方針にしろ、日々、いろいろなことが変わってきます。医療の現場は毎日、異なつたことが起こるので、毎日行くと毎日、新しいことを学ぶことができました。

2年目は、とにかく一人で急変時に対応できるようにならないといけないという思いから何でも率先してやっていたと思います。そして、3年目に仕事をしながら就職活動も行いました。就職先も見つかり、「4年目に退職して行きます。」と言ったら上司が「そんな3か月ごとの期間雇用だから、3か月たつたら帰ってきなさい。」とってくださいました。今ではそんなことはできませんが、その当時は看護師も足りず、約4か月、休職をさせていただくことができました。しかし、休職でしたので帰ってこなくてははいけません。あの時、退職していたらそのまま、その後もシブスナースをしていたかもしれません。しかし、そうすると今の経験はできなかったと思うので、どちらが良かったかはわかりませんね。

とにかく、元の職場に戻つたのですが、私の看護師をする目的は達成してしまつたので、次にどうしよう

か、全く考えていませんでした。やりたいことをやってしまったので、この先、何をしよう、何がしたいんだろう、と考える日が続きました。これではやる気も勉強する気も出ないし、どうしていいかわからない時に受けた研修で赤十字の活動を知りました。学生の皆さんはすでに赤十字について学んでいますが、私は県立の学校出身のため、赤十字については就職をしてから知りました。それも、しっかり勉強したわけではありませんでした。赤十字の事業は皆さんも良くご存知の血液事業や病院のような医療事業、看護大学や看護専門学校といった看護師教育などがあります。その中に国内災害救護活動と国際活動があります。しかし、その当時の私は国際関係の仕事を私がするとは全く考えていませんでした。私は小学校で1 \$ 360 円と習った年代です。その時代ですので、看護師が国際活動という考えは頭にありませんでした。ただ、シブスナースとして、海外には出向いて行ってその楽しさも知っていたので、興味はあるという感じでした。【写真 2】

## 災害医療救護活動を行って

研修で赤十字の活動内容の、国内災害救護活動について学んで帰ってきたときにちょうど、病院内でも災害医療救護活動のための研修について考えるので、一緒にどうかと声掛けいただき、その研修の企画・運営について担当することになりました。そこで起こった

のが、1995 年の阪神淡路大震災です。この時、実際に医療救護活動に従事して、避難所への巡回診療を行ったり、臨時救護所の開設をさせていただいて、医療救護活動ってこんなふうに行うんだと考えて、研修に活かしていきました。実際に研修をしていく中で、迷うところもあり、どうやって研修を発展させていくのがいいのか考えていた時に、今度はこの近くで東海豪雨災害が起きました。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、2000 年の集中豪雨でこの地域のあちこちで浸水の被害が出ました。特に名古屋の西にあたる新川という川が決壊し、川の西側の方たちは避難を余儀なくされました。ここでは夜間の避難所へ巡回診療を行ったり、やはり、臨時救護所を開設して活動しました。

このような活動をするすると皆さんは少し感動して「被災者のために！」とか思われるかもしれませんが、その時の私の印象に残っているのはそれではありませんでした。実はこの当時、救護活動をした翌日はお休みを取ってもいいですよ。などということは全くありませんでした。病院では人員も少ないですし、救護に行っている間は別の人が私の代わりをしてくれるので、帰ってきたらすぐに勤務に就く必要がありました。医療救護活動も業務としては普通の仕事として日勤扱い、帰ってきたらすぐ病院での仕事が行われていますが、この当時はまだまだ、災害救護活動に対して医療職の意識も薄かったのです。しかし、私は帰って



【写真 2】



きて翌日、すぐに通常の業務を行ってもなんの不調もありませんでした。初めて会う人たちと一緒に働くことも普段とは異なる業務を行っても特に戸惑いもありませんでした。また、派遣中もどこでも眠れる、余震があっても眠れる、食べ物も冷たくて堅いおにぎりが出てきてもあまり苦にならないし、トイレもまあ何とかなる、ということがわかりました。この時、私にとって災害医療救護活動は別に気負わなくてもいい、いつもの仕事をしている時と同じ、大丈夫だなと思いました。

## 国際医療救援活動への道

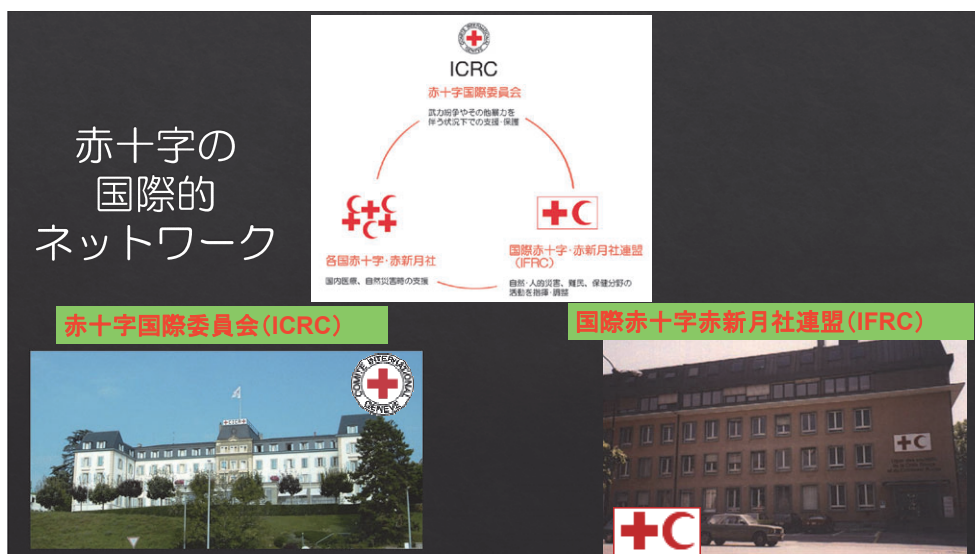
そのように思いながら毎日忙しくしているところに、今度は赤十字の国際活動というのがあることを知りました。学生の方たちは知っていると思いますが、赤十字の国際的な組織として国際赤十字委員会(ICRC)、国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、そして日本赤十字社(日赤)のような各国赤十字社があり、それぞれの役割があります。特に災害時はこのIFRC、連盟がその役割を担い、調整を行います。【写真3】

日赤が災害時に初めて組織的な救援活動をしたのはインド西部地震災害の時です。この時に緊急対応ユニット(ERU)を出して対応しました。これは大規模災害の発生に備え、緊急出動可能な専門家チーム及び資機材を整備し、災害発生後、ERUを出動させ、

当初1ヶ月間、自己完結型の活動を実施するというものです。日赤の保有するERUは基礎保健型ERU(以下、ERU)で、被災地でクリニック程度の医療を提供することを目的としています。

このERUの資機材を展開する訓練が東京の日本赤十字看護大学で行われることになり、参加してみないかと声をかけていただいたのが、私が国際医療救援活動を強く意識したきっかけでした。資機材は実際にはいくつかの箱に入った物が山積みになされていて、それを一つ一つ開けて、リストにある物が入っているか、きちんと使えるか、どうやって使用するかを確認し、次回、使用しやすいように再収納することでした。中身は診療用や、通信に関連する物、テント・トイレ・シャワーなどを含む要員の生活に必要な物資、もちろん食べ物、そして、水に関する物、水を直接持っていくことはできないため、川の水や雨水を生活用水に使用できるようにするための機材が入っています。この訓練には日本各地の赤十字病院・施設から医師、看護師、技術職、事務職など様々な職種の人が集まりました。ここで、今までに国際活動を経験した人からの話を聴くこともでき、その人柄や経歴などに「面白そう。」と、徐々に国際活動に対する興味が高まりました。今、考えるとこの時、参加していた皆さんはそれまでも国際活動に行かれた経験を持ち、この訓練後も多大な貢献をされた方たちばかりだったと思います。【写真4】

ただ、この訓練に参加したからすぐに国際活動に従



【写真3】



【写真 4】

事できるわけではありません。「行きたい、って言うてもすぐに国際行けるわけじゃないからね。」と言われ、「はい、分かってますよ。でも、このメンバーで行ってみたいね。」みたいなことを会話した覚えがあります。

## 実際の国際医療救援活動

ところが、翌年の 2004 年、イランの南東部で地震が起こり、この地震災害の被災者支援に日赤は ERU を出すことになりました。「昨年、展開訓練に参加した皆さん、出動できますか？」と日赤本社から連絡がありました。もちろん、「はい、施設が OK ということであれば行けます。」と返事しました。私自身は健康的にも家庭的にも行くことに問題はないのですが、国内での災害医療救護活動が数日であるのと違い、1 か月から 2 か月の長期、職場を離れることとなります。その当時、病棟看護師長をしていましたので、病棟のことも心配でした。しかし、看護部、病院が協力するといってくれ、応募することになりました。でも、正直、この時点で自分としてはチームメンバーに選ばれるとは思っていませんでした。国内災害救護時も気負いなく、支援活動に赴くことは大丈夫だと思っていましたが、英語も苦手だし、未経験者なので経験者が選ばれるんだろう、くらいな考えでしたが、予測は外れ派遣が決まりました。

実際行ってみて、初めての経験で少しドキドキする

こともありましたが、やはり基本は国内で行っているのと同じだな、と感じました。チームで行くとはいえ、人数には限りがあるので、仕事は何でもやりません。診療の介助はもちろん、薬剤の調合、受付、診療順番のコントロール、自分たちの使用する機材の消毒と滅菌、その準備・片付け、物品の確保、患者統計やデータ・書類の整理など診療に関することに加え、食事の準備や片付け、掃除など仕事はとてたくさんありました。これは医師の仕事、これは看護師の仕事、これは事務職の仕事というように分かれていませんし、分けることもできません。全員が協力して行わないと人も物も金も時間も限られる中では活動できないのです。私が少し助かったのはこの当時、チームは日本人ばかりだったことです。本来はチーム内でもコミュニケーションは英語ですが、日本人と一緒に仕事をしているため、どうしても日本語で話してしまいます。おかげでチーム内の意思疎通はとてもしやすかったです。現在はチーム自体が多国籍スタッフで構成されるため、英語でのコミュニケーションが原則となっています。【写真 5】

活動中の生活はと言いますと、こんな感じです。居住していたのは各国赤十字社がそれぞれテントを張って、そこで生活していました。広い敷地の中にテントがずっと連なっていて、食堂やトイレ・シャワーなどは共有で使用しました。このため、私たちのいたテントからトイレまではるか遠く、100 m くらいあったかな？そこに並んで順番待ちをします。朝は早めに起き



## 実際の業務

【写真 5】

てまずはトイレの順番待ちから一日が始まりました。今は簡易式のトイレを持参して、処理も有機処理を施すなどの対応がとられていますが、この当時は、居住地や地元民の生活の場から離れたところに穴を掘って、その上に工事現場にあるようなトイレを設置してありました。これは他国の赤十字社の水や衛生専門の人たちが設置してくれましたが、5 mほどの穴を掘ってトイレを作る、終わらせるときには穴を埋めてくれるという作業は本当に大変で、他国赤十字社の皆さんに感謝しました。便器の中を覗き込むと穴の底が丸見えで、ここに落ちたら二度と這い上がれないから気をつけようと皆で話し合ったことを覚えています。もちろん、人じゃなく、物、特にポケットや手に持っていると落としやすく、落ちたら拾えないということです。【写真 6】シャワー室を掃除してくれているのは 1 年生の時に赤十字原論を講義してくださった日本赤十字社大阪府支部の森先生です。森先生は優秀な管理要員で、すでに何度か任務に就かれた経験もあったため、各国赤十字の人からも一目置かれる存在でしたが、そういう人がシャワー室の掃除も部屋の片付けも何でも協力して行うということで、ますます人気になっていました。人員がたくさんいるわけではないので、皆ができることを協力して行わないと仕事だけでなく生活も成り立っていかないのです。この辺りのことは後で出てきますが、日本人のとてもすばらしいところが自然と出ている感じでした。あっ、肝心のシャワーはお湯が潤沢に出ることはなく、途切れたり時々

水になったりという感じですが、それを不便と感じるか、シャワー浴びて幸せと感じるかは自分次第だと思います。

一度、派遣されたのでこの後はもうないだろうと思っていたら、ちょうど 1 年後にスマトラ島沖地震が起き、覚えていらっしゃる方も多いかと思いますが、津波により大勢の方がなくなり、甚大な被害が発生しました。この災害の被災者に対して、日赤は三度目の ERU 出動を決めました。ここに再度、参加させていただくことになりました。

「行くと向こうでは、どんな生活をしてるの？」とよく聞かれます。表にあるのはスマトラ島での活動時の 1 日のスケジュールの例です。大体朝、5 時から 8 時くらいに起床、私は通常は 6 時半くらいに起きていました。起きて朝の支度を整え、朝ご飯を食べて、当番制で 7 時半くらいから NGO ミーティングへ行って、いろいろなチームの人とミーティングがあります。支援団体は赤十字だけではないし、医療の支援だけでもない。ここで、支援団体全体の状況を把握し、調整し各チームに持ち帰って活動計画を立てます。ということで、戻ってくると今度は自分のチーム内のミーティングが始まり、全体の流れを受けて、自分たちの今日の活動の内容を再度、検討することになります。このため、NGO ミーティングに参加する人は、早くに朝食を済ませて準備をしておく必要があります。NGO ミーティングは全て英語で行われるので、これも私にはたいへんでした。【写真 7】





【写真6】



【写真7】

ミーティングで今日の活動内容が決まるとそれぞれの役割に分かれて、午前・午後の活動を開始します。巡回診療のメンバーは朝から出かけて夕方まで帰ってこられないこともあります。病院支援のメンバーは午前中は病棟の診察をして、午後は手術などの仕事もありました。先ほどの ERU の資機材を使用した避難所キャンプでのクリニックの仕事もあります。昼休みに宿舎に帰ってこられるメンバーは帰ってきて昼ごはんを食べますが、暑いので昼休みは2時間です。この写真は皆、倒れこんでいるわけではなく、この下が大理石でひんやりして涼しく感じるので、床にべったり張り付いてお昼寝というか休憩します。

午後の仕事が終わって、宿舎に戻ってくるとまずミーティングして、夕食をして、日誌をつけて、一日の仕事を振り返り、翌日の計画立案、仕事の準備をして、記録も残し、管理もする。また、国内ではあまり出会ったことのない病気も勉強しないといけない。マラリアも日本の病院では見たことはありませんでしたが、自分もかかるかもしれないので、自分の体調管理もしないといけないような場所で働くわけです。巡回診療に出かけていけば、まずは観察、被災したお宅にお邪魔して「いかがですか？」と話を聴きながら観察をしてアセスメントをし、判断をしないといけません。あれっ？これってどこかで聞いたのと同じ、と思

われるかもしれません。学生の皆さんが習っている看護過程の展開です。仕事が一区切りしたら、水浴びしておやすみなさい。こんな感じで毎日が過ぎていきます。テレビとか娯楽とか何かあるわけではありませんから、自分で楽しみを見つけてちょっと息抜きをしますが、基本は集団行動です。

いろいろな職種のメンバーと一緒に業務を分担します。チームワークはとても大切です。また、いろいろな国の人とも一緒に仕事しているので、話もしないといけない。ここでは、言葉によるコミュニケーション能力も必要です。1日に何回ミーティングがあるの？というくらい、あっちの団体にミーティング、こっちの団体にミーティングです。レポートも慣れない英語で記載します。この写真は仲がいいわけではなく、私としては必死で教えてもらっているんです。これでいいのか、この書き方で通じるのか、英語の堪能な管理要員に一文一文確認してもらって記載しました。何気ない中で心とむ時もありますが、ほぼ毎日、このような生活が続きます。【写真8】

国際医療救援活動って決して華やかなものではなく、観察、アセスメント、環境整備、看護管理、ミーティング、チームワーク、自分の健康管理、を行いながら、自分から何でもやらないといけない。決して、待っていても誰もこれやれとは言わず、自分から見つけてやらなければ何もできません。これって今、学生の皆さんが学んでいることと同じだと思います。私にとっても、普段の職場と何が違うのか、何も変わらない。国際医療救援活

動の場だからやるわけではなく、毎日の業務と同じことを場所が変わってもやる、やらないといけないということだったんです。だから、今やっていることがそのまま国際医療救援活動に活かしていけるんです。

前述したようにどこに行っても看護の基本というのは、ナイチンゲールが行っていた時から変わっていない。きれいな水があって、清浄な空気があって、清潔なシーツがあって、それにプラスして、自分のこれまでの人生経験や培ってきた看護観、学んできた知識・技術、それが繋がっているのだと思います。これが、私が国際医療救援活動に従事した理由であり、学びでした。

## 国際医療救援活動で心に残っていること、考えさせられたこと

もう一つ、皆さんからの要望は印象に残っているエピソードは何ですか？ということでした。4回の派遣経験を通じて、印象に残っていることはたくさんあります。その中のいくつかをご紹介します。

### 【家族の絆】


2005年に起こったパキスタンでの地震災害被災者救援事業での出来事です。地震自体でのケガではありませんでしたが、仮設住宅でやかんのお湯を誤ってかぶってしまったようで、7～8歳の子が足に火傷を負って受診しました。熱湯は幸い足だけにかかったようでしたが、すでに数日が経過しており、その後、き

## 看護師の業務一例(報告書も必須)

- ◇ 診療の介助
- ◇ 救急患者の対応(心肺蘇生、外傷、重症熱傷など)
- ◇ トリアージ、救急搬送
- ◇ 母子保健活動、出産介助
- ◇ 衛生教育
- ◇ 地域での保健指導
- ◇ 予防接種
- ◇ 衛生材料・薬品など医療物品の補充、整備(清掃)
- ◇ ローカルスタッフへの教育
- ◇ 受付、スタッフの調整
- などなど……

いつもの業務と変わらないことがたくさんあります。  
そして、いつもの業務に加えることもたくさんあります。

慣れない英語で  
レポート



【写真8】



れいな水も手に入らず、薬もなく、適切な処置ができなかった結果、水疱であったところが破れ、化膿して表皮はドロドロに溶けた状態でした。痛みもあり、自分で歩くことができなくなってしまったようでした。火傷自体は重症というほどではなかったのですが、パキスタンではこのような家族が往々にして、山の奥の方に住んでいます。

初めてクリニックに来たときは、お父さんがおぶって4時間かけてやってきました。火傷をしたときにすぐに来たらいいのですが、この子をこのクリニックに連れてくるだけで一日仕事になってしまいます。お父さんはこの子のために一日仕事を休んで連れてきたのです。なぜ、このエピソードが印象に残っているかというと、この子の火傷を最初に見たとき、これは適切な処置がされれば必ず良くなると確信しました。それはICUで勤務していた時の火傷患者さんの看護経験から、この火傷の状態がすぐにアセスメントでき、どのような処置が適切かも理解できたからでした。日本には、今は傷を治す創傷治癒目的の貼付剤などがありますが、ここではもちろんありません。今あるもので対応することが必要です。しかし、彼の火傷はそのようなものがなくてもきれいな水でせっせと洗って汚い皮膚を落とし、自分の皮膚の再生を促せば確実に治癒すると思ったので、医師とも相談し、その治療を進めました。ここで問題は、入院設備があるわけではなかったもので、この処置をどうやって行うかでした。毎日行えば早く治っていくのですが、それは困難であったため、お父さんに1週間に一度、この子をここに連れて来れるか聞いたら、どんなことをしても自分が連れてくるから何とか歩けるようにしてやってほしいというのです。きっと今の生活で歩けないことがこの子の将来にとってどんなことなのかお父さんが一番、理解していたのだと思います。お父さんはその約束をきちんと守ってくれ、毎週、往復8時間の山道をこの子をおぶって通ってくれました。来るたびに清潔な水で汚い皮膚を洗い流すので、泣いて痛がっていました。必ず、良くなるから頑張ろうと毎回、励まし合いながら処置を行った結果、5週間後に見事、自分の足で歩いて来れるようになりました。

もうこれで、通わなくていいよと伝えた時にお父さんがとても喜んで「ありがとう、ありがとう」と何度も言ってくれたのをとても鮮明に覚えています。私か

らするとこの子を毎週連れてきてくれたお父さんに感謝したかったです。この子が治癒したのは私たちの力でなく、毎週、往復8時間もの道のおぶって連れてきてくれたお父さんと辛い処置に耐えた彼自身の回復力だと思いました。こちらがお礼を言いたかったです。後で、このお父さんが子どもをおぶって歩いてきた道はどんなものか確認しましたが、クリニックのある町に一番近い辺りの道を自分の足で歩くだけでも大変な砂利の坂道でした。8時間と言いましたが、私たちの足ではたぶん、倍くらいかかるのではないかと思います。この道を毎週、子供をおぶって通ってくれたお父さんの偉大さに家族を思う気持ちにとっても感銘を受けたのを覚えています。

#### 【治療へのジレンマ】

次も患者さんに関することです。日本での治療とのジレンマを感じた一場面でした。寒い時期でしたので、被災者はテント暮らしの中で火をたいて暖をとっていました。その夜、その火がテントに燃え移り、火傷を負った女性が運び込まれました。日本でだったらこれくらいの火傷はすぐに治療を開始すれば命にかかわることはないと思ったのですが、夜間であり、この患者さんを搬送する手段がないのです。なんとか早く病院設備のある施設に搬送したいのですが、あちこち地滑りも起きている状況で車で搬送することは危険が伴います。一番いい方法はヘリコプターによる搬送ですが、こちらでも危険なため、夜間飛行は禁止されました。とにかく祈るような気持ちで一晩、この女性を看護し、翌朝、一番のヘリコプターで搬送しましたが、結局、この女性が助かったかどうかはわかりません。でも、日本だったら、と考えるとすごくジレンマを感じた出来事でした。

#### 【文化、価値観の違いによる難しさ】

もう一つ患者さんに関連することで、乳児の心肺蘇生の時のことです。ある早朝、心停止の乳児が運ばれてきました。すぐに心肺蘇生を開始しましたが、残念ながら治療の甲斐なく亡くなりました。この心肺蘇生の最中に医師が、記録のためにも写真を撮っておけというのです。私は乳児の心肺蘇生の写真を、それも親御さんがいるところで撮らなくてもいいじゃないかと躊躇していたのですが、先生たちは早く撮っておけというので撮りました。親御さんにすごく申し訳ない気持ちでいっぱいでした。案の定、数日後にお父さんが

やってきて、「あの時、写真を撮っていただろう？」と聞かれました。私は絶対に怒られると思ったんですね。日本だったらなぜ、あんな大変な時に写真を撮るとはどういうことだ、となるだろうなと思ったので、すぐには返事ができず、通訳の人に彼は怒っているの？と尋ねました。そうしたら、私の予測した答えとは全く違う返答が帰ってきました。「その（撮った）写真をくれないか。」と言われたのです。実はこの子は生まれてまだ間がなく、写真を撮ったことがないため、この子の写真が家に1枚もないから、私の撮った写真にこの子が写っているなら写真が欲しいということでした。その時、私は写真を撮ったときは違う意味で申し訳ないと思いました。こんなことなら、きちんと写真をとってあげればよかった。災害に会い、子を失うという大変な状況の中で写真が欲しいと訪ねてきてくれた父親に私は、写真を撮っていたにも関わらず、大切なお子さんの顔は写真には写っていないんです、と伝えなくてはならず、撮ってはいけないと思い込むのではなく、きちんと確認すればよかった。その人、それぞれその場にそった大切なことがあり、これが正しい、これが間違っている、で分けられるものではありませんでした。

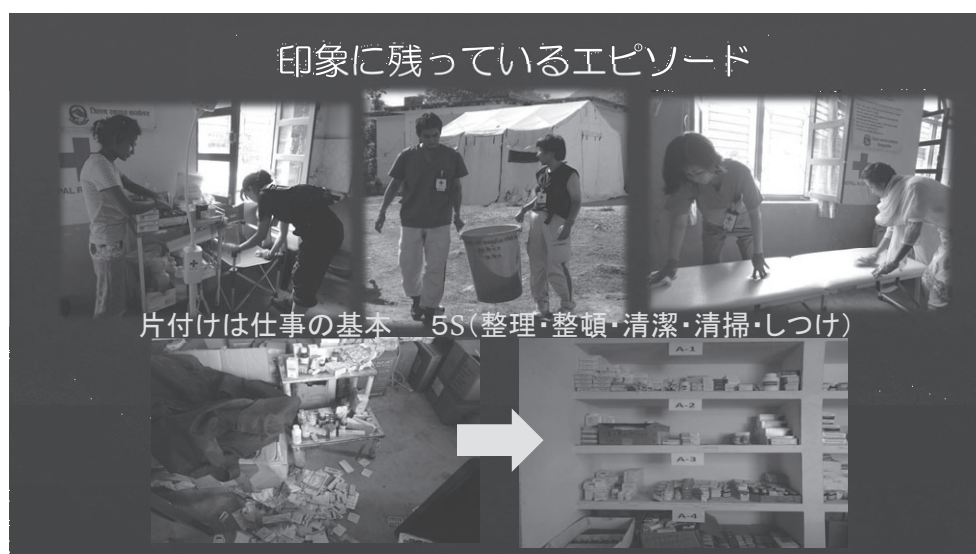
もう一つ、「5S」皆さん聞いたことがありますか？「整理」「整頓」「清掃」「清潔」「しつけ」という日本発祥の職場の改善活動です。日本人にはとっては当たり前のことと思われるかもしれませんが、これが海外ではなかなか難しいものです。私はこの5Sが仕事の

基本と思っていますが、「清掃」一つとっても文化の違いによる困難さを思い知らされます。【写真9】

ネパールの地震被災者救援事業の時、この写真で私と一緒にゴミを拾ってくれているのは日本人の医師です。また、日本人看護師にとって診療施設内の清掃や物品の洗浄を行うのは当たり前のことと映るかもしれませんが、ネパールではカースト制度があり、仕事の内容がしっかりと分かれています。日本人の医師や看護師が清掃やゴミ拾いをするのは構わないが、自分たちの制度の中では、他のカースト階級の人の仕事を取ってしまうことにもなり、それはしてはいけないことです。それが悪いこととかではなく、文化なのです。そのような文化の中で、一緒に働いてくれた地元の人たちは、私たちの行っている清掃を手伝うといってくれました。これをする事で、彼らは地元の人たちから侮蔑の目を向けられるかもしれない。でも、一緒にやるといってくれたのです。これはとても勇気のいることだと思います。彼らの勇気に感謝するとともに、異文化の中で働くことの難しさを痛感する出来事でした。

#### 【救援って、何？】

最後に毎回、一番考えさせられたことは「救援って何だろう？」ということです。この写真は他の団体が救援に来て、自分たちが帰るときに現地に寄付していった物品です。でも、置き方はこれでした。皆さんが見たら考えられないと思うかもしれませんが、一部屋に全て、とても整理された状態とは言えない状況で



【写真9】



【写真 10】

置かれてありました。現地の人もこれもらったけど、どうしようかと困惑していましたが、寄付いただいたものであり、粗末な扱いはできません。中には最先端の医療物品も入っていました。【写真 10】

まずはこれを整理することから始め、何があるのか、どうやって使用する物なのかを説明し、現地の人理解して、今後使用できるようにすることが必要です。その点では日本人は先ほどの 5S の「整理」「整頓」がとても得意だと思いました。写真は実際に活動中に私たちのチームが行った「整理」「整頓」です。現地の人にもとても感心されました。

現地の人が欲しいといったから置いて行くことがいいのかどうか、特に現地では休む間もないほど忙しく、片付ける時間もない中、どうしたら現地の人も寄付して下さった方も双方がよかったと思ってもらえるような支援になるのか、きちんと考えないといけないと思うエピソードでした。

## まとめ

救援って、何かを人に与えるとかでなく、自分が教えられたり、自分に何ができるのか問う機会であると思います。その時、私が痛感したのが、十数年間行ってきた自分の経験が全て基本であり、培った知識・技術・看護観がとても役立ったということです。その意味で学生の皆さんに、10 年後、もっと先かもしれませんが、何をしたいと考えますか？と問いたいで

す。やりたいことが、今日できるわけではありません。明日できるわけでもないのです。3 年後になるのか 5 年後になるのか、もっと先かもしれませんが、最初の第一歩はやりたいと思うこと、それは今日からでもできるはずです。

国際医療救援活動でなくてもかまいません。「自分は何がやりたいのかな？」って、考えてほしくて、「10 年後のあなたへ！ ～その時のために、今、何をしますか～」というタイトルをつけました。10 年後の皆さんがやりたいことが見つかり、それに向かっていけますように。そして、私はそんな皆さんの手助けができるような授業ができればいいなと思っています。

最後に、今回このような機会を作ってくださったいとすぎ祭実行委員の皆さんに心から感謝申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

※日赤の活動は災害救援活動、国際活動ですが自身の経験については医療救護活動、医療救援活動と表記してあります。

## 文献

赤十字の国際活動 2016

<http://www.jrc.or.jp/activity/international/pdf/RedCross2016.pdf>

日本赤十字社活動実績 ネパール（2015 年ネパール地震 救援・復興支援事業）

[http://www.jrc.or.jp/activity1/international/results/190125\\_003736.html](http://www.jrc.or.jp/activity1/international/results/190125_003736.html)